

いてふの実

宮沢賢治

青空文庫

そらのてっぺんなんか冷たくて冷たくてまるでカチカチの灼き^やをかけた鋼^{はがね}です。

そして星が一杯です。けれども東の空はもう優しい桔梗^{ききやう}の花びらのやうにあやしい底光りをはじめました。

その明け方の空の下、ひるの鳥でも行かない高い所を鋭い霜のかけらが風に流されてサラサラサラ南の方へ飛んで行きました。

実にその微かな音^{かす}が丘の上の一本いてふの木に聞える位澄み切った明け方です。

いてふの実はみんな一度に目をさしました。そしてドキツとしたのです。今日こそはたしかに旅立ちの日でした。みんなも前からさう思つてゐましたし、昨日の夕方やつて来た二羽の鳥^{からす}もさう云^いひました。

「僕^{ぼく}なんか落ちる途中で眼^めがまはらないだらうか。」一つの実が云ひました。

「よく目をつぶつて行けばいゝさ。」も一つが答へました。

「さうだ。忘れてゐた。僕水筒に水をつめて置くんだつた。」

「僕はね、水筒の外に薄荷水^{はくかすゐ}を用意したよ。少しやらうか。旅へ出てあんまり心持ちの悪い時は一寸^{ちよつと}飲むといゝつておつかさんが云つたぜ。」

「なぜおつかさんは僕へは呉れないんだらう。」

「だから、僕あげるよ。お母^{つか}さんを悪く思つちやすまないよ。」

さうです。この銀杏^{いんげい}の木はお母^{かあ}さんでした。

今年は千人の黄金^{きん}色の子供が生れたのです。

そして今日こそ子供らがみんな一緒に旅に発^たつのです。お母さんはそれをあんまり悲しんで扇^{あふぎ}形^{がた}の黄金の髪の毛を昨日までにみんな落してしまひました。

「ね、あたしどんな所^{ところ}へ行くのかしら。」一人のいてふの女の子が空を見あげて呟^{つぶ}やくやうに云ひました。

「あたしだってわからないわ、どこへも行きたくないわね。」も一人が云ひました。

「あたしどんなぬにあつてもいゝからお母^{つか}さんの所^{ところ}に居たいわ。」

「だつていけないんですつて。風が毎日さう云つたわ。」

「いやだわね。」

「そしてあたしたちもみんなばらばらにわかれてしまふんでせう。」

「えゝ、さうよ。もうあたしなんにもいらないわ。」

「あたしもよ。今までいろいろわが儘^{まま}ばつかし云つて許して下さいね。」

「あら、あたしこそ。あたしこそだわ。許して頂戴。^{ちやうだい}」

東の空の桔梗の花びらはもういつかしぼんだやうに力なくなり、朝の白光りがあらはれはじめました。星が一つつつ消えて行きます^ゆ。

木の一番一番高い処^{ところ}に居た二人のいてふの男の子が云ひました。

「そら、もう明るくなつたぞ。嬉しいなあ。僕はきつと黄金色^{きん}のお星さまになるんだよ。」

「僕もなるよ。きつとこゝから落ちればすぐ北風が空へ連れてつて呉れるだらうね。」

「僕は北風ぢやないと思ふんだよ。北風は親切ぢやないんだよ。僕はきつと鳥さん^{からす}だらうと思ふね。」

「さうだ。きつと鳥さんだ。鳥さんは偉いんだよ。こゝから遠くてまるで見えなくなるまで一息に飛んで行く^ゆんだからね。頼んだら僕ら二人位きつと一遍に青ぞら迄^{まで}連れて行つて呉れるぜ。」

「頼んで見ようか。早く来るといゝな。」

その少し下でもう二人が云ひました。

「僕は一番はじめに杏^{あんず}の王様のお城をたづねるよ。そしてお姫様をさらって行つたばけ物を退治するんだ。そんなばけ物がきつとどこかにあるね。」

「うん。あるだらう。けれどもあぶないぢやないか。ばけ物は大きいんだよ。僕たちなんか鼻でふつと吹き飛ばされちまふよ。」

「僕ね、いゝもの持つてるんだよ。だから大丈夫さ。見せようか。そら、ね。」

「これお母^{つか}さんの髪でこさへた網ぢやないの。」

「さうだよ。お母^{つか}さんが下すつたんだよ。何か恐ろしいことのあつたときは此^この中にかくれるんだつて。僕ね、この網をふところに入れてばけ物に行つてね。もしもし。今日は、僕を呑^のめますか呑めないでせう。とかう云ふんだよ。ばけ物は怒つてすぐ呑むだらう。僕はその時ばけ物の胃袋の中でこの網を出してね、すっかり被^{かぶ}つちまふんだ。それからおなか中をめつちやめちやにこはしちまふんだよ。そら、ばけ物はチブスになつて死ぬだらう。そこで僕は出て来て杏のお姫様を連れてお城に帰るんだ。そしてお姫様を貰^{もら}ふんだよ。」

「本当にいゝね、そんならその時僕はお客様になつて行つてもいゝだらう。」

「いゝともさ。僕、国を半分わけてあげるよ。それからお母^{つか}さんへは毎日お菓子やなんか沢山あげるんだ。」

星がすっかり消えました。東のそらは白く燃えてゐるやうです。木が俄^{には}かにざわざわしました。もう出発に間もないのです。

「僕、靴くつが小さいや。面倒くさい。はだしで行かう。」

「そんなら僕のと替へよう。僕のは少し大きいんだよ。」

「替へよう。あ、丁度いゝぜ。ありがたう。」

「わたし困つてしまふわ、おっかさんに貰つた新しい外ぐわいたう套すわが見えないんですもの。」

「早くおさがしなさいよ。どの枝に置いたの。」

「忘れてしまつたわ。」

「困つたわね。これから非常に寒いんでせう。どうしても見附けないといけなくつてよ。」

「そら、ね。いゝぱんだらう。ほし葡萄ぶどうが一寸ちよつと顔を出してるだらう。早くかばんへ入れ

給たまへ。もうお日さまがお出ましになるよ。」

「ありがたう。ぢや貰もらふよ。ありがたう。一緒に行かうね。」

「困つたわ、わたし、どうしてもないわ。ほんたうにわたしどうしませう。」

「わたしと二人で行きませうよ。わたしのを時々貸してあげるわ。凍えたら一緒に死にませうよ。」

東の空が白く燃え、ユラリユラリと揺れはじめました。おっかさんの木はまるで死んだやうになつてじつと立つてゐます。

突然光の束が黄金^{きん}の矢のやうに一度に飛んで来ました。子供らはまるで飛びあがる位輝やきました。

北から氷のやうに冷たい透きとほつた風がゴーツと吹いて来ました。

「さよなら、おつかさん。」「さよなら、おつかさん。」子供らはみんな一度に雨のやうに枝から飛び下りました。

北風が笑つて、

「今年もこれでまづさよならさよならつて云ふわけだ。」と云ひながらつめたいガラスのマントをひらめかして向ふへ行つてしまひました。

お日様は燃える宝石のやうに東の空にかかり、あらんかぎりのかゞやきを悲しむ母親の木と旅に出た子供らとに投げたおやりなさいました。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第八卷」筑摩書房

1979（昭和54）年5月15日初版第1刷発行

1984（昭和59）年1月30日初版第7刷発行

入力：林 幸雄

校正：久保格

2002年11月10日作成

2008年10月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

いてふの実

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>